



# 日本山岳会々報

昭和21年 5 月

134

創刊昭和 5 年

## 故人への便り

松 方 三 郎

古い會報の綴込を眺めてゐたら昭和十二年四月の號に『ウエストン氏への便り』といふ自分の小文を発見しました。今から勘定して丁度九九年前の事でありました。貴下の七十七になられた御祝ひに日本山岳會が浮彫で青銅の肖像を造つて上高地に記念碑を造る計畫を報告したものです。

壽像は豫定の通り會員佐藤久一郎君の手で作られ、場所も適當なものがあつて記念碑が立派に出来上つた事は、その後の會報や『山岳』に詳しく報告されてゐる通りであります。私はその年の七月から日本を離れてしまつたので、實は、その記念碑の出来上つた姿は見る機會がありませんでした。

そしてこの九年の間に、世界もさること乍ら、日本も幾つかの段階を経て、大變に大きな變化をしてしまひました。貴下が亡くなられたことは我々も當時風の便りで耳にして居りましたが、その頃はもうヨーロッパと日本との距離は火星と地球ぐらひ離れてしまつてゐました。そしてその後に来たのが大平洋戦争であります。我々は自分達が新しい對米英戦争の真中

に抛り込まれた時、つくづく考へたことは、貴下がこの一大不幸事を見ずして逝かれてよかつたといふ一事でありました。日本を心の底から愛し、日本のためにその晩年の大半を献げることを辭せられなかつた貴下が、若も日英相闘の報を耳にされたならば、それだけ命を縮められたであらうことを識るからです。

戦争時代は諸事萬端紛分極端なところまでいつてしまひ、金屬回收とかいふので屏の把手まで献納するといふ事態に立至りました。そのため東京の町からは醜惡な銅像が影を消し、町の景觀としては多少見直したことは事實でありましたが、上高地の一角にはめ込んだ二尺に三尺の貴下の壽像さへも勝つ爲めに溶かされ相成らぬといふことになり、東京から懸々これの取外しに出かけるといふ騒ぎでありました。聞けば、ちからから出向かなければ地元の人びがひきはがしまじき勢ひだつたさかいふことでありました。その頃は又、大休日日本山岳會もあるものが英國人の肖像を掲げてゐるなど以ての他だといふ風の議論さへ或る一部には

あつたさかいふ話も聞きました。眞逆、山登りをする仲間からはそんな聲は出なかつたと思ひます。が世間にはその位の『愛國論』があつたとしても不思議でない程の世の狂ひ方でありました。こんなことを考へるにつけても日本がそれ程の氣狂ひ状態に飛び込む前に貴下が亡くなられたことは、不幸中の幸ひであつたと考へざるを得ないのであります。

そんなあらじをくゞつて來た最後が昨年の空襲騒ぎであります。虎の門の會のルームも五月二十五日の夜の空襲で瞬時にして烏有に歸しました。會としてはかけがへの無い大切な資料、虎の子の書籍や幻燈板等々、何とも諦め切れない澤山の財産がこの時灰となつてしまひました。そして同じ焼けかもの、中に例の浮彫の像もあつたのです。

會では上高地から下して來たものをその儘にルームの一個にそつと藏つておいたのであります。流石に金屬製であるだけに、火をかぶつてひどく傷んではゐましたがこれだけは灰にならずに残つたのであります。或はその道の専門家の手に托すれば原狀を恢復し得るかと思つてゐるのであります。そして私達は又再び貴下のその記念像を上高地に擔いで上つて、もと

の岩の上にはめ込む時の來るのな心に期してゐるのであります。

九年に及ぶ凍結時代を経て、日本の山岳界は再び餘るに昔の活動を取戻さうとして居ます。會でも何人かの有能な會員を戦線の犠牲者として失ひました。先輩の中には戦災のために倒れた人も居ました。併し往年の山の仲間の多くは依然として健在であり、山そのものは、この數年間人々から省みられなかつただけに、一針雪のよい姿を取戻したに相違ありません。敗戦の後數年にしつて會つてのドイツがヒマラヤ探險隊を出したこ

## 目 次

- 故人への便り……………松方三郎…一
- 白山のまかんこ踊……………磯野三郎…二
- 見果てぬ夢……………土田新一…四
- 湯殿山參詣日誌開書……………藤島玄…五
- 街の山男風景……………田中榮藏…六
- 茨木さんを憶ふ……………望月達夫…七
- 茨木猪之吉氏遺難報告書……………塚本繁松…八
- 會員通信……………望月親・坂井喜造…九
- 會務報告……………一〇

をこの機曾に想起することが妥當であるかどうかは問題でありませうが、日本人が屈託のない自然の懷に立歸ることによつて、そこから新しい生命を勝ち得るであらうことを私共は信じて疑ひません。

そして私達は貴下が嘗つての若く純真であつた日本を愛された如く今日新しく生れ代らんとしてゐる日本に對し希望を寄せられ、その生長を暖かく見守つて下さる事を祈つて已まないのであります。



## 白山のかんこ踊

磯野三郎

私が白山の、<sup>かんこ踊</sup>を調べ出したのは白山の初登攀の研究に就いて開祖泰澄と云ふ坊さんを調べるに當り、どうしても「かんこ」の由緒として誤り傳へられてゐる諸説を第一に片付ける必要が生じたからであつた。

### 白山の麓白峰

此處は日本海に注ぐ手取川の主流白山の山麓白峰である。もう肌寒い秋風が白山御前から吹き下されて来る舊盆、出作りに山入りしてゐる人達は数十日ぶりで親村たる白峰に胸をときめかせながら戻つて来るのである。

やがて盆の日が昇れる。何處からかカンカラ／＼とかん高い音を

突抜けるやうな調子の早い音が山深い溪流の響と相和して聞えて来る。村の廣場で踊りが始まつたのである。村の若衆、姫は勿論爺さん、婆さん迄、團扇又は手拭を手にして踊りに出て来るのである。餘り他所では見掛けぬ單調ながら珍らしい踊りである。村の人は神迎踊と自稱してゐる。

古老は語る。

「これにはな、昔白山を開いた泰澄大師様との話があるんでござやる。」

と前置きて話してくる。それに依ると、昔々河内（白峰から奥、市の瀧温泉白山登山口に到る間の呼稱である）の源吾と言ふもの、或る朝奥山の方を眺めると誰も神

の住む山として山入りせぬ白山の中腹に煙が立ち上つてゐる。不思議に思つて、やつとそこまで登つて行つて見ると、二人の供をつれた殿かなる僧が火を焚いてゐる。源吾は餘りの驚きに、ひれ伏す。僧は「俺は泰澄と云ふ者だ白山の山頂にて修業して今下つてこゝまで来た。里へ案内を乞ふ」その事に、源吾はこれは神の我が里に下られたものに相違ないとして早速歓迎の意味にて舞を踊つて見せた。これがそもそも「神迎踊」の始まりだと云ふのである。

源吾は笹を伐り開いて案内して下つた。それで泰澄は姓を笹伐り依りして笹本源吾と名を賜はつた。云ふ。先年（昭和九年・大洪水）まで直系たる佐々木家は續いてゐた。何處の傳説もそうである様にこの話にも勿論信するわけには行かぬ點が多々ある。然し民話だとか、傳説と云ふものは味へば味ふ程味が出て来るもので、傳説だからさて一笑に附すべきものでは無い。我々はそれらの各種傳承の内から史家の裏書だとか又正史をも覆へす様な材料資料を發見する事が多々あるのである。私は又かゝる純粋な民話とどんどん減びて行く現今、今のうちにでもこれを完全に近い記録を残して置き度いと思ふのである。

### かんこ歌集並註釋

一、加賀の白山、

しらやまなれど、

雪は降るまい六月は

一、河内の奥は朝寒い所ぢや

御前の風を吹きおろす

註 御前 白山最高峰のこと。

一、向の山に光るものは

なんじやいの、

お月かお星か螢の虫か

今集る嫁の松明か

一、今集る嫁の松明ならば

差上げて燈せ瘦男

註 瘦男 此れを地方の人はヤサ男とか、ヤセ男とか歌つてゐる。勿論どんな字を書くかも知つてゐない。瘦男即聖殿ではな

からふか云ふ説もあるが、随分鼻の下の長い聖殿である。如何にこの地方でも、そんな風習はない。これは瘦男と誤ふのが

本來で古來やせ男とは無男（へりもち衆）の事を云ふからであ

る。八瀬男ではなからふか。）

一、河内の奥に煙が見える

イネや出て見よ、

霞が霧か、

御前の山の燃ゆるのか

一、御前の山の燃ゆるのとあら

ばノノの手を引きンナボを

負ふて、

そして陰地の裏山へ  
註 イネ 吾が妻の呼稱ノノ 爺さんの事。

ンナボ 束つ子のこ。

孰れも白峰の方であつて、前

二風の歌文からは白山が噴煙を上

げてゐるのが眼前に見える様であ

る。（白山の火山史については他

日述べて見度いと思つてゐる）

一、お十七八を櫓に乗せて、

何處から見ても八重櫻

一、踊れノ、皆出て踊れ、

踊らにや明日は口惜かる

一、踊らなくても明日は口惜し

い事は無いわいの

明日から山の草取や

一、今年や豊年、

穂に穂がさがる、

一把の束に米七依

註 當白峰の土地に古來より稗

田ばかりで米なんか作らなかつ

た。（現今は大部作られる様になつた）この一文は他の民話に

も多くある歌であるから他所か

ら輸入されたものであらう。

一、一把の束に七依御座つた

祝の酒が又七ちやう

一、波々注いで七樽飲んで

謡ふて舞ふてやあ踊れ

一、謡ふて舞ふて明日の夜明

けまで

手拍子揃へて皆踊れ

一、来い来い来いと言ふたからこそ来たれ

一、お前の子供は幾人御座る小池に一人、小川に一人

市ノ瀬川の瀬に一人

註 小池ノ杉峠を越えた福井縣五ヶ村打波川上流小池を云ふのであつて、白峰人は他領まで進出した。

小川ノ三ツ谷川を言ふ。

市の瀬川の瀬ノ手取川本流。

一、御十七シヨウジャコ、二十をシヨウジャコ

盆かたびらの袖ジヨジャコ

註 ミ小母さん何々おくれミと物を買ひに行くと、ミこれミあれと何すらにシヨジャコミと言ふ。何れにしませうかの意で、

白峰の人達に取つては盆の晴着は憧れの一つである。歌意は十七の娘妹にしやうか二十の姉妹にしやうか、それよりも盆の晴着をもらふか。

一、ヤ ころどうぢや、をし踊りかいな

謡ふて舞ふて踊らんせ

一、イネやメンバ出せ草餅貰ふた、

然も喰ひかけの角の様な

註 メンバは食器の事で、喰ひかけのもちをもらふことは如何に村人同志の仲が良いかが何はれる。

一、どうぢや若い衆、なんで氣が浮かぬ

河原の石でさへも浮かしや

浮く

註 此の附近の急流では石が流れ行くこゝを見てゐるからである。

一、や よいよい子、猫の子にや、

にしん棒猫もよいわいの鼠とる

一、かんこを腰に粟の草取は心は辛氣盆惡し

註 かんこニ本州中部地方山間部一帯に於て「かんこ臭い」さて「ケナクサイ」の意味が通じてゐる。本文の「かんこは、野良仕事に出る時腰に下げる蚊遣り火の事である。

一、ころり／＼と踊る子はや

後立りはつらくい

以上大体古来よりは現今歌はれてゐるものを全部集め得たと思ふ。

昭和初年の郷土藝術復興を高潮とした頃白峰小學校の訓導に公下ミ云ふ人あり。神迎踊を復興せんと

歌にも踊にも新しい調子を加味した。現在そんなわけで新しい歌調

も歌はれてゐるが、前掲の全文は幾多の老人に就いて昔からのものをのみ記した。

次に歌の調子を紹介する。私が歌つたものを友人がビヤノで合せ採譜したものである。



この「かんこ」踊歌には變なことに長短がある。即ち大体に於て七七五のものゝ、七七七、七七五調のものゝある。この樂符は後者の十四文字多いものを採つたが短い方は一行三行とな歌へば好いのである。

次に踊りを簡単に説明する。

踊り手は古來手拭のみを持つたのである。然し公下先生が新しい調子を加味してからは末廣や團扇を用ふ。(近頃は日の丸の鉢巻をしめ白衣に空色の袴をつけた神主風にされてゐる)十數年前金澤市祭に於て出羽町にて各地の手踊りを紹介した時出演したのが始めてある。その時は神主みないな、上衣と袴を着け末廣を持つて踊つた。

「かんこ打手」も踊り子と一緒

に大きな輪に入つて踊る。手拭を片手で持ち打振りながら四歩前進して三歩戻る。只それだけなのである。踊りは至つて平凡の様である。「かんこ打手」は徑五寸、筒長一尺三寸、筒の材はケヤキ、皮

は馬皮を使用、かゝる「かんこ」を頭から斜に腰邊にぶらさげそれを兩手で以て小棒で一面のみを打つのである。

次に「かんこ」なる言葉の起りを考へて見よう。前述せる神迎と言ふ説の他に神子踊、閑古鳥踊だと言ふ説がある。又一説に「かんこ」を振つて田の草とれば、やれ／＼さわや、盆惡し

この一歌詞よりして「かんこ」の語源は蚊遣火の「かんこせ」とする説がある。孰れも妄説であつて肯定し難い。

「かんこ」は神迎にも非ず、蚊遣火にも非ず又神子でも閑古鳥でも無い。羯鼓を用ひて踊るから「かんこ」踊なのである。即ち神迎の

字句をカンコと讀むわけがない。カミムカヘと呼ぶべきである。當字に過ぎぬ。蚊遣火は本洲中部地方山岳地帯に於ける大體の標準語があつて偶然發音が一致したものであらう。然らば私の説を次に述べよう。この歌集を見るに大体に於て三四、四三、三四五の句調を採つてゐるから形式からして徳川時代より遡るものでは無いことが分る。然したま／＼歌詞の中に叙上の形式を採らず句調が亂れてゐる個所を發見する。

例へば

「波々ついで七燈のんで謡ふて舞ふて、やあ踊れ」

の如く四三四三三四五等のやうな古歌も入つてゐる。語調の亂れた室町時代頃のものゝ多少残つてゐるのであつて、室町末期より歌ひ出され、徳川初期にまともめられたものと考へられる。泰澄の生存してゐた奈良朝時代のものでは斷じてない事は明らかである。

扱て私が云ふ羯鼓説が正しいと假定すると、餘り他所には見かけない羯鼓を持つて踊るこの踊がどうして現今白山々麓のみにあるのか。一見獨自の踊りの様に見えるが。不思議に思ふのである。併し羯鼓であつたが室町の頃には益々大衆化して門付の乞食が羯鼓をたいて歩いたもので三味線の渡來せぬ以前の民衆樂器の一つであつた。(最近迄東京市内の下駄の齒入屋さんが「カツコ」たいて歩いた

「かんこ」踊考

「かんこ」なる言葉の起りを考へて見よう。前述せる神迎と言ふ説の他に神子踊、閑古鳥踊だと言ふ説がある。又一説に「かんこ」を振つて田の草とれば、やれ／＼さわや、盆惡し

この一歌詞よりして「かんこ」の語源は蚊遣火の「かんこせ」とする説がある。孰れも妄説であつて肯定し難い。

「かんこ」は神迎にも非ず、蚊遣火にも非ず又神子でも閑古鳥でも無い。羯鼓を用ひて踊るから「かんこ」踊なのである。即ち神迎の

「かんこ」なる言葉の起りを考へて見よう。前述せる神迎と言ふ説の他に神子踊、閑古鳥踊だと言ふ説がある。又一説に「かんこ」を振つて田の草とれば、やれ／＼さわや、盆惡し

この一歌詞よりして「かんこ」の語源は蚊遣火の「かんこせ」とする説がある。孰れも妄説であつて肯定し難い。

「かんこ」は神迎にも非ず、蚊遣火にも非ず又神子でも閑古鳥でも無い。羯鼓を用ひて踊るから「かんこ」踊なのである。即ち神迎の

「かんこ」なる言葉の起りを考へて見よう。前述せる神迎と言ふ説の他に神子踊、閑古鳥踊だと言ふ説がある。又一説に「かんこ」を振つて田の草とれば、やれ／＼さわや、盆惡し

この一歌詞よりして「かんこ」の語源は蚊遣火の「かんこせ」とする説がある。孰れも妄説であつて肯定し難い。

「かんこ」は神迎にも非ず、蚊遣火にも非ず又神子でも閑古鳥でも無い。羯鼓を用ひて踊るから「かんこ」踊なのである。即ち神迎の

のは其の民間傳承の名残りではないからふか。その民衆樂器が現今此の奥山地方に残つてゐるだけの事である。

然らば「かんこ踊」或はこれに類した踊りが、他の何處にか残つて居てもよい筈である。今その地理的分布を尋ねると「かんこ」を以て踊る踊りが今尙二三ではあるが各地に残つて居り、又最近まで存在したと云ふ記録を発見するのである。例を二三挙げて見る。

#### 一、羯鼓踊

三重縣鈴鹿郡高津瀬村を中心として伊勢一圓に今尙行なはれてゐる。神事舞で羯鼓と稱する大鼓を胸につけて踊る。

#### 一、かんこ踊

山城國相樂郡上狛村に於て孟蘭盆の精進踊に用ひたもので「かんこ」とは腰鼓なりと。現今は滅びてない。

#### 一、諫鼓踊

岡山縣岡山市の西北の近在にも「かんこ踊」あり、又山口縣熊毛郡勝間村にも諫鼓踊なるもの各々ありしも今は全く跡を絶つた相である。

以上の考證によつて白山々麓白峰の「かんこ踊」も又羯鼓踊から來た「かんこ」であることは間違無く、地方の人の云ふ神子踊りでも神迎踊でも蚊遣火踊でもないことが判ると思ふのである。

(昭和二一・三・一八記)



## 夢はてぬ見

土田新一

半田澤川に出るまでは國境標識に沿つて進んだ。川と云ふより鐵と云ふほうが適當な半田澤川を、日本で最北の川を一人で廻行するのは地表と肉體の闘争ではなく私と云ふものを完全に破壊してしまふか、如れぬ神経と意志の確執の克服が必要だつた。國境山脈は猿毛色に映つて數千メートルの高度をもつてゐるかのやうに見えた。單調な無言劇の唯一の伴奏はスキーの軋しき私の呼吸である。荷物の重さも肩にこたへた。

逢見山の南肩を越へ、鮭尾川源流に別れたのは半田澤川所を出てから八日目だつた。食糧が輕くなるにつれウインパー天幕は濕氣を吸つて重くなり折り疊んでリュックに入れるのに半時間もかかる有様だつた。北大岡氏の數香岳のレポートで想像してゐた通り登攀としては樂なアルパイトではあつたが、ラヂウスを消したあとの寒さはきびしかつた。シュエラフザツクの中でウイスキーを飲むときアラインゲンガの宿命を呪はずには居れなかつた。

鮭尾川沿ひに蘇聯領に入つて見たいといふ誘惑も強かつた。ピレオで捕へられニコライエフスク、オムスクとシベリヤな「旅させられる」この放浪の極致に共感をもつ人はいだらうか。得難い未知

なる景觀と經驗が意外に容易に得られるかも知れない。私と云ふ人間はそれで幸福なのだ。旭川師團司令部、樺太廳で誓約した言葉、「決して迷惑をかけない」に私の常識は忠實であつた。小暗く曇つたやうな日も、滲しな白く雪の經帷子の上に太陽の輝く日もだまりこくつて西へま進んだ。

鮭尾川第二支流をすぎてからラヂウスは氣化器の具合が悪くなり喘息病みのやうな煩をだした。胃はチーズミウイスキーに疲れて重かつた。

十六日目のひるすぎ安別の町に入った。動い間宮海峡に面して寒さに闘つてゐる木造のこの小さな町の警察の暖爐にあたり乍ら一つのさ、やかな目的を果した自己満足と悦びにひたつた。白秋が詩によんだフレツプ・トリツプがつぼみを閉く日まで、年に三、四度寄港するさ云ふトランパーが来る日までイクラを有に濁り酒を友に暮さねばならない。

「この幻想も見はてぬ夢となつてしまつた。五指山、カプアス河廻行、日本のヴァガボンドの旅券にサインし、くれる國はあるだらうか。」

(二一・二・二八)

## 山の繪の會と

## 茨木畫伯遺作展

期日は確定してゐませんが六月中に萬世橋の交通文化博物館で、山の繪の會が開かれます。其際茨木畫伯の遺作が別室に陳列されますから、どうぞ多數參觀に出掛け下さい。山岳會でも其計畫はありますが、かなり先の事でありませう。

## 會報原稿募集

復刊二回目迄の會報は御覽の研究、紀行等が不足して居ります。由岳文化再建のため奮つて御寄稿下さい。其の他論文、考證、通信、隨筆もとより結構であります。又寄稿に會員とは限つて居りませんし、貴重な文獻は必ず掲載致しますから會員外の方も遠慮なく御寄稿下さるやうお願い致します。

原稿紙は十五字詰にして下されば編輯に好都合であります。

〆切は毎月十五日

宛先は東京都目黒區駒場一高前菅園住宅塚本方、日本山岳會通信連絡所、に御願ひ致します。

連絡所は五月下旬右記に移轉しました。



壬明治二十五年辰閏六月  
湯殿山參詣日誌聞書

藤島玄

和紙綾の裏、越後國東蒲原郡上

條村大字拂川字雲前寺、加藤平八  
齡二十五年。豐饒たる七十九歳の

平八翁は、半世紀前の當時の大旅  
行であつた伊勢參宮と共に村民か

ら錢別を貰つて出た『下の御山』  
と通稱される出羽三山詣での後、

出羽山脈を横斷して奥州仙臺から  
金華山、松島を巡遊し、磐梯山麓

の越後街道を阿賀野川沿ひに歸村  
した十三日間の憶ひ出を語つた。

日誌と特に印象に残つた事は何十  
度と繰返し語るので明瞭であるが

聞者がそれ以外に立入つて訊ねる  
と、ヤチヤネ(覚えない)と笑つ

て了ふ。何しろ一回に木炭八十二  
貫。米一升が八錢位の昔である。

記

●舊聞 六月十五日出立 晴

新曆八月七日 以下十三日間 晴

同行者は拂川本村二名當村二名で  
皆初旅である。津川の城源寺の法

印標から霧敵の暇をもらへ、  
村の鎮守白山神社に別火自炊の三

れた數取りで、十を數へて一本折

り十本目に西ノ澤へ全裸体をさあ  
つと沈めて垢離をとり神々を拜ん

だ。拂川衆は十二山ノ神で行ふ。  
仕度は行者の白装束で、冠さて八

尺位の白木綿で頭を巻き、頭陀袋  
を肩に、白風呂敷へは提飯、草鞋

油紙等を包み、菅笠、蓑、蘆を纏  
い、賽銭は文錢百枚宛差しにさし

て腰に巻く。參籠三日目未明に發  
足し津川に集合、諏訪峠を越す。

●東蒲原郡行地 朝食 二錢  
●北蒲原郡赤谷 晝食 一錢

茶屋は味噌汁、吸物等を一杯一錢  
位で出し、魚類は行人様と云つて

出さぬから安直で旅行が出来た。  
●北蒲原郡菅谷 會津屋泊十三錢

新發田へ出ず大友經由六時過ぎ着  
村より九里で、不動尊參詣。御札

一錢御護符三厘 御守一錢

●十六日 北蒲原郡乙 晝食一錢  
胎内川に沿ひ黒川村より乙大日如

來參詣。御燈明一錢 御札一錢  
●岩船郡端谷 米澤屋泊 十四錢

○岩船郡端谷 米澤屋泊 十四錢  
金屋から船で荒川を下つて早着。

日和山砂丘から日本海を初見し、  
望遠鏡に一行驚く一錢 草鞋八厘

●十七日 羽前國加茂港晝食一錢  
酒田通ひの三好丸へ傳馬船で移る

航海中は悪臭と船酔で嘔吐しつづ  
仲間の膝の間に轉々苦む。八

時發航。三時入港。船賃二十六錢  
●西田川郡大山町布袋屋泊十四錢

善寶寺迄一里餘を船疲れて人力車  
に乗り湯ノ濱望遠五錢。善寶寺參

詣。御札四錢 菓子二錢

●十八日 西田川郡鶴岡町晝食二錢  
○東田川郡手向村團禪院泊六十錢

但御山案内先達代共。通知済みの  
越後衆定宿團禪院に迎へられ、直

に羽黒山神社參拜。御神樂を奉納  
して宿に入る。夕飯は酒飲み放題

餅餅食ひ放題。御神樂代一圓  
●十九日 月山八合目晝食 七錢

愈々御山日である。居村十二戸全  
部が作業を休んで鎮守様をお参り

するので、荒天で登拜する。東  
が白んでから發足。羽黒神社は素

通り。遅發で道中は同行衆だけ。  
八合目御田ヶ原小屋で赤飯一盃五

錢を買つて宿の握飯と共に晝食。  
陣竹杖五厘も購ふ。拜所に焼米

を撒かず文錢を投げ、あやに  
と拜んだが神佛の名は記憶ない。

頂上月山神社では鬼瓦へ投錢して  
願望成就をおろがみまつる。霧な

く晴天だが鳥海山の外は、遠山も  
山花も雪溪も共にヤチヤネである

御札受拜、御朱印押しはない。  
●西田川郡仙人澤小屋泊 三十錢

月山下山途中の印象はない。湯殿  
山は三時過ぎて參拜ならず、先達

が持參の梵天を御湯に浸して分配  
し、鐵梯子で梵字川に降る。仙人

澤小屋には山伏が多勢祈禱してゐ  
た。一行も水垢離をつた。

●廿日 西村山郡本道寺晝飯二錢  
再び極樂湯を湯殿山に登り直し、

跳足で入り御土をさり手拭を浸し  
たりして參拜。御札二十三枚拜受

白岩道で先達と別れ志津へ下る。  
●西村山郡白岩町加賀屋泊十四錢

寒河江川沿ひに白岩に至る。三山  
の懸軸や土産物購入。御山懸け成

就祝ひ酒代一人分共六十三錢  
●廿一日 北村山郡關山晝飯二錢

白岩六時發。關山迄六里。二里半

にして船渡と二錢 三里半で晝食

山形盆地を寒河江、天童と通過し

たらしいが道筋の記憶はない。

●宮城郡作並村 早坂屋泊十三錢

關山峠を越し山形縣より廣瀬川沿

ひに宮城縣に入り温泉を遠望す。

●廿二日 仙臺市國分町晝食

作並より六里。此間道路警請中で

通行危険。十一時仙臺市に入る。

●仙臺市國分町丹野屋泊 十八錢

市内見物、物産館で鐵瓶を初見。

●廿三日 陸前石巻晝食五錢五厘

仙臺より塩釜まで鐵道三里十錢

塩釜より石巻へ汽船八里二十錢

天満に順別酒盛二錢五厘宛。

六時頃目出度歸宅仕事。以上

●陸前石ノ巻 龜屋泊 二十錢

金華山行き汽船の都合で宿泊。

●廿四日 黄金山神社晝食

御護摩の御初穂、晝食共二十五錢

鮎川迄汽船三十錢 傳馬船三錢

草鞋休代二錢 菓子一錢 山鳥渡

し五錢 海上廿四町ありと。

●陸前石ノ巻 龜屋泊 二十錢

金華山參拜して歸航中夜に入る。

飛魚や翌朝の湖の満干に驚く。

●廿五日 宮城郡松島晝食三錢五厘

松島へ陸路を行く。給紙一錢一厘

●宮城郡塩釜千歳屋泊 二十錢

風光絶佳の松島遊覽廿六錢 鹽

釜迄船賃四錢 四人分酒代十七錢

●廿六日 安達郡本宮晝食 三錢

鹽釜より仙臺、福島、本宮と福島

縣に入り汽車三十三里。六十九錢

岩根を過ぎ猪苗代湖畔に出る。

●耶麻郡鹽下 越前屋泊 十五錢

磐梯の山影を浮べる湖畔の据風呂

に初めて浴す。仔馬を多く見る。

●廿七日 會津若松市晝食 三錢

猪苗代湖北岸を辿る。飯盛山白虎

隊之墓は詣でず市内にて買物す。

●河沼郡氣多宮平野屋泊 十四錢

殿様街道を坂下より塔寺に至る。

●廿八日 河沼郡下野尻晝食八厘

東松峠を越し、野澤より阿賀に添

ふ。鳥井峠にて越後に戻る。榮山

より天満迄馬車に荷を付け一錢

天満に順別酒盛二錢五厘宛。

六時頃目出度歸宅仕事。以上

# 街の山男風景

田中 榮藏

過去といふものはふりかへつてみるおかしさが、その當時は眞剣になつてやつてゐたものだ。満洲事變から太平洋戦争まで、日本人のやつたことにケチをつけようと思へばいくらでもある。爆撃・焼失・敗戦——これが戦争だつたのかと一息つく今日この頃、過去をいってしまふには餘りに現實が俗しすぎる。記憶がなまなましいが、これが負けた事實なのだ。こんなことは昔にはいくらもあつてローマ興衰史やフランス革命史をよむまでもないことなのだらう。知らないから現實に目をみはるの、過去の衆をたぐれば百年前にはこんな世相はさらにあつた。知らざるも面白くはなから面白くはない。

街にゐる山に登る者はたしかにこの戦争の間（特に最新）あまり山に登つてゐないやうだ。これも別に異とするにたりない、當然のことだ。なんぞか出かけたと思ひめぐらしても勤めの身の上、暇がつくれず、商賣をしてゐる者が行軍登山とか攀登部隊について山の氣を吸つてきたばかり。山に行かれないことは山を戀ふものらしく、山の本をよむ、アルパムを眺

める、語りあふのたぐひである。登山再編成論からなつた一人の山の題名がいかにといふ偏狭風景がくりひろげられたのもこの國らしい。もうその頃友人達とも山行は問題にしてゐなかつた。本當に山が好きならば、どんな手段・方法をもつてしても出かけるだらう。ハンパな山登りはしてきだが、心持だけは毅然たるもので、いつやめてもさは常々思ひめぐらしてゐたものだ。戦争が片づいたら、氣の合つた連中さゆつくり出かけてませうかいと、いはす語らすうちに出来てゐた。たゞときどき家出するやうにして山に行つた者が人少氣のない種高だと、白米のお櫃を出してくれた有峰のこまなごを、きかせられると疥癬でもないのでにむすむすしてこまつた。たゞ元氣な年頃に山がけられないのはいかに残念ではあつた。

戦局の動きは、もう山のことを考へる餘裕を失ひかけてきた頃から街の山男風景ははじまる。さいつて別段めずらしい話でもなく、爆撃前後から街のなかに、俺は登山者（スキーヤー）だつたんだといふ風采をした者がかなり目につくやうになつてきたことだ。鐵兵の小説だつたかに共産黨員が潜行するのにスキーヤーの服装をかりて歩くのがあつた。こゝではそん

な話でもない。昭和八年の末に除隊する前に註文しておいたルックザツクが家に送いて、かへるなり、またいりもしないズタ袋を買つたりしてとお目玉をくつた。どうも山服さひい、ルックさひい、野良猫よろしくツマまれる性質をもつてゐるらしい。それが戦争になり、本土空襲さひはれ出すと、叱つた本人が叱つたルックを避難用にせびませがみだしたのだからおかしい。いつたい登山道具さひふものは人間の最低單位の生活を

するのに必要なものはなにひまつ不自由しないやうに作つてゐるのだから一通りをもつてゐれば乞食となつてもこまらな（乞食になるまでに賣つてしまふつて……）戦争になつたからこんなことがわかつたのではない。先人の尊い賜物にちがひなく、切實に要求されないさ知らないのが凡人の常だから。石川欣一さんの家庭では、ピツケルで雨戸をこちたり、風雨の夜ポンツ修理にランタンを使はれるぐらゐ合理化してゐるやうな。これらのガラクタは山行が終るこ

さにも納屋や押入れにまぎこめられるのが普通で、このまじこめられが二年もつづいた。たまに雨や雪の日にスキー靴や鉄靴が御用になつたりはしたが……

の品がルックであり、次に内容品ではテキストブックなみだが、こゝでは爆撃下の都市生活に登山道具・服装がいかに有効であつたかを報告するさしよう。

大きいキスリングのルックには避難用のものをつめ、出勤用にはサブルックに非常食・水筒・雪眼鏡とヤツク・ゲートル（はいてゆく）とヤツク・鐵兜・飯盒・スプーン・醫藥品……さスキー靴をはいて會社へさいふのが昭和二〇年一月から終戦まで私の日常の姿であつた。なにもこんな恰好をしたからといつてそれが山戀ひのためだつたなんていふほどのリベラリズムは残念ながらもつてゐなかつた。これが一番行動しやすかつたからにはほかならない。會社の山好きの連中も大なり小なりこんな姿をしだしたある日、よいヤツクをもつてゐた友が着てゐないので、どうしたときと、あれは火傷のときこまるかられといふのであるほど

とは思つたが、ニヤニヤしてゐるので、さらに追窮すると、野良仕事に着て行つたら父親が着て寒くなくてよいとまき上げられたといふ。やはりヤツクを買つたときは無駄費ひをするとかれた。山服姿で焼夷弾のなかけ廻つたのは今考へるとおかしきもあるが當時本當に生まじめに露出部分に

凍傷ならぬ火傷にあふぞとばかり冬山そのもの、重裝備にしたものだ。古い鉄靴を一式すりへらし、通動にはとつときのスキー靴もはきつづいて終戦となつた。いくら使つても重寶な飯盒・テルモスもありがたい。宿直をよきなくされたり、壕の中で暖い茶がのめたりとは山友達なら傾くに客ではなだらう。白い麻のヤツクも伏せたり、壕に入つたり十色になつたのが詔書でともにもとの使命にかへつた。イエガーのゲートルも濃緑のものはまだ使へる。サブルックも一九三五年のもので十年目に大奉公をしてすりきれてきた。キスリングは非常米を入れたために風助に孔をあけられた。あまりいたんでないものは暖袋（焼け出されなかつたので）無疵のものはピツケル・アイゼン・ザイルでこればどうも無用の長物だつた。

さて爆撃中は便利だつた登山道具も、それらをもたぬ人々さといふや大衆はもたぬ。ざれだけの差異があつたであらうか。山に登る者は、常に避難とか避難とかただ單に小さい草山に登るにしても、これをバカにしてゐない。岩場があつたり、橋も流れたり、雷雨や吹雪もあらう。急病や怪我もあらう。食物も欠乏しよう等々の考へられる悪條件をみな計算に入れ精神的

に考へ、その場にあたつてとるべき手段を誤らずに行動できる事。

そのために重いルツクを背負ひ歩くのだ。これをまさかこんな爆撃のために應用しようと考へてゐたものはゐないであらう。もつとも除隊のときに大隊長は、背囊にせおえるもので諸君はこの生活を忘れることなく、社會生活を始めたいと語つた。不景氣から氣づいていつたとはとれない眞面目な顔で、寝るこゝ・食ふこゝ・着るこゝ・生きるこゝの今日このごろなるほどと頷く。山戀ひの若者であつた私はこの一言に大いに意を強うして、退官になるこの少佐を見なほした。

いらないからといつて持つてゆかないときは必ず代用があつた處置ができるやうにする。焼け出されたといつて野宿する術も知らないでは山では乞食にもならない。雨の中でも焚火が出来、飯盒がなくとも辨當箱でもバイ罐でも飯はできる水筒でお茶が入れられる。生きてゆくこと食ふことは山でも最も重要な技術である。飯は面倒だからパンで三度／＼は續くまい。昭和の世代だからといふと高僧連に笑はれる。爆撃中の行動はどうかすればよいが最も手際よく早くすませて、ソツがなくその後

男達だつたのであるまいか。もつとも演習もすい分やつたし、経験もした事柄となつてしまつたが……自分ひとりがいかに生きてゆくか。これすらこの世の中ではたいていのことではない。氣の合つた友との山行ですらトラブルはある。山から街にかへつてみて、いかに生活空間が複雑多岐であるかに一驚することは歸旅の茶飯事である。街の山男なるも煩はしい。なんとしても自己完成が出来て来なければ楽しい世とはならない。

終戦となつて爆撃中に敢闘した銃靴もいつしか兵靴と變つてきた。ルツクも配給や買出しに使はれた。冬オーバーを焼いた者がヤツケを着てゐるが、あとはくたばれてはゐるがもとの姿にかへりつゝある。雪が降つたり山仲間が集ると、どこかへ行かうやと話した。この間も近くのスキー場へ出かけた若い人が、その當日は配給量の倍も飯を食つたのに、荷もごく軽いのにへばつてしまつて、とんと頑張りがきかないといつた。街の山男はみな同じであらう。これではおそらく野原に出てタンポポが咲いてゐるのに驚くだらう。まして山に行つたらどんなだらう。それに街が焼けて見はらしのよくなつた今日このごろ街の中で山が見えない處はない。

山戀ひの乞食には慰めや勵ましになると同時にものたりない氣分が横溢する。本當に山の乞食にでも



茨木さん  
を憶ふ

望月 達夫

なつたら少しは悟れるか。

編輯部註

筆者は舊姓諏訪多氏

茨木さんが新雪の糖高に忽焉として逝かれてから早や半年近い月日がたつた。その半年の間に戦局は逐日緊迫の度を加え、正に國難は迫つて私的な凡ゆる感情を放逐せざるを得ぬ状態に迄なり至つてゐる。併し親しい人の死は時に惻々として魂をうつて在りし日の茨木さんな憶ふこと切なるものあるは戦陣に起居すると否に拘はらず同氏を知れる多くの人々の齊しく経験されるところであらう。

茨木さんが新雪の糖高に忽焉として逝かれてから早や半年近い月日がたつた。その半年の間に戦局は逐日緊迫の度を加え、正に國難は迫つて私的な凡ゆる感情を放逐せざるを得ぬ状態に迄なり至つてゐる。併し親しい人の死は時に惻々として魂をうつて在りし日の茨木さんな憶ふこと切なるものあるは戦陣に起居すると否に拘はらず同氏を知れる多くの人々の齊しく経験されるところであらう。

ら親しくうかがつたが、その奇しき縁の話は同氏のたぐひな話術の所爲もあつて今でもあり／＼と記憶に甦えつてくる。(後これは増山清太郎氏の筆で針葉樹會報に載せられた。)

茨木さんが新雪の糖高に忽焉として逝かれてから早や半年近い月日がたつた。その半年の間に戦局は逐日緊迫の度を加え、正に國難は迫つて私的な凡ゆる感情を放逐せざるを得ぬ状態に迄なり至つてゐる。併し親しい人の死は時に惻々として魂をうつて在りし日の茨木さんな憶ふこと切なるものあるは戦陣に起居すると否に拘はらず同氏を知れる多くの人々の齊しく経験されるところであらう。

初めて御目にかゝつたのはさして古いことではない。たしか立教のナンダゴツト遠征の講演會の歸へりだつたと思ふ。頃日同氏と親しい吉澤、村尾兩氏に紹介されてお茶を飲みながら話したのがはじめてであつたと思ふ。その時は今信州の高原で療養中の小谷部君も一緒だつた。その後虎ノ門で又その他の會合の時よく一緒になつては色々御話をうかがつた。同氏と村尾氏——パンちゃんを謂つた方が私達の親しい先輩としてピンとくるが——との關係は更にいみじきものがあつて、これは實て私達の針葉樹會で一夕茨木さんの口か

行衛不明が傳へられてから時局繁忙の折にも不拘會から塚本、交野、田邊の三氏が遠く信飛の垣迄出かけて捜索に従事されたことを聞き、定めし茨木さんの靈もその厚情に喜ばれたことであらう。茨木さんと同じ町内に住つてゐた小谷部君が最近よこした便りにも同君がいなく悲しんでゐる様子が讀みとれた。昭南にある村尾氏なども驚きと悲しみに涙してゐることと思ふ。會の爲にも古くからの良き會員であり又役員であり、恊に哀惜の念に堪えないものがある。茨木さんの山岳畫や古い時代の會との交遊に就いて述べるには私よりも適した方が多々あらう。たゞ御氣の毒にたえない氣持にあふれて綴つてみた次第である。はじめて茨木さんの繪に接したのは——繪さ云つてもスケッチであるが——例の田部さんの「山と溪谷」に挿入されてゐる田部さんと木暮さんなふがいた小さなスケッチである。「山と溪谷」は出版當時毎日の様に本屋へ出かけてはまたか／＼と店頭に見られるのを首を長くして



# 茨木猪之吉氏 遭難報告書

塚本 繁松

待つたゞけであつて——(當時は前著「日本アルプスと秩父巡禮」などは全く知らなかつた)——内容も寫眞もスケッチもよく覚えてなり、又一番影響を受けた山岳書の一つでもある。それ以來「山岳」の古いのやなにかで次第に茨木さんの繪に接する様になり油繪の佳作、傑作も屢々拜見した。又數年前からは山岳書のカットや装幀等にも随分活躍されてゐた様であり、三省堂から出た「山の素描」は私の好きな書物の一つでもある。これは私一個の感じではあるが、同氏のものは氣分がむくまゝにものされたスケッチ様の輕いものや、さくに古い「山岳」にみがかれたものが全く他の追隨を許さぬ茨木さんの本領のやうに思はれるのである。山岳書の立場からは中村清太郎氏などからお話がかゞへたら茨木さんの爲にも一番いいのではないかと思ふ。

〇〇から當地へ歸へつて今は中支で活躍してゐる大塚武君が送つてくれた「生活美術」山岳號に偶々中村さんの「赤岳」の繪と並んで茨木さんの「朝のスバリ岳」の原色刷がある。あれは同氏のもの、中でも傑作の一つと思ふ。眺めて遙かに同氏を偲び哀悼の意を捧げる次第である。

(昭二〇早春、於北方戰陣)

茨木氏は昭和十九年春から遭難せられる迄三回、いづれも二週間以上になつて上高地から穂高方面に入山、嚮作にあたられた。

最後の折は九月二十日前後に上高地に入つて西糸屋に滞在、一週間程の間に二枚の油繪を描かれ、未サインのまゝ西糸屋に預けて潤澤小屋に向はれた。

潤澤小屋に滞在中附近の紅葉を賞揚され、來年は是非息子を連れて來たいと言つて居られたさうである。九月三十日迄數日雨。十月一日にははかされての豫定である高山市へ出發されやうとしたが、當日は晴天だつたけれども、まだ岩がぬれてゐて滑るからと一日延期され、こたつにあたつて葉書にスケッチ二枚を小島水氏と他へ、又留守宅へ便りを認めて潤澤小屋主人に發送を依頼された。

二日午前七時頃辨當一食分を持つて出發された。豫定は、穂高小屋から白出谷を下り槍見温泉、平湯を経て高山に向ふのであつた。當日は午前晴午後曇であつた。計畫では大休十月の七八日頃上高地へ歸られる豫定だつたさうだ

が、九日となり、十日となつても歸られないので、上高地滞在中の山の繪の會の宮坂千代藏氏が心配されて、飛騨方面に問合せられたが

立寄る筈の槍見温泉に姿を見せてゐないので遭難の疑が濃くなつた折から名古屋帝大醫學部の加藤氏一行が、丁度茨木氏の豫定の道筋を通つて高山へ出ることになつたので捜索方を依頼したが同行は途中何物も發見せず槍見温泉、蒲田、平湯など何處にも立寄つてゐないことが確實となり、途中遭難したものと確定された。槍見温泉から白出瀧場附近迄捜索隊が出されたが得る所なく引返した。

十六日東京の新聞に發表されたので東京在住者は始めてこの事實を知つた。虎ノ門本會事務所に角田、吉澤、塚本閑治等の諸氏に私も加はつて會としての方針に就て協議した。宮坂千代藏氏は連絡のために上高地から歸來、詳しく報告された。緊急に捜索隊を出すことになつたがその人を得る事は容易でなかつた。茨木家からは親戚の方達二人が十七日出發された。會からは四、五名出發する事になつたが、二十日夜實際に出發出來たのは矢野武一氏と私だけだつた。二十一日夜西糸屋でよく状況を聞き、二十二日朝潤澤小屋へ出發した。その間穂刈三壽雄氏が所用をかねて上高地迄出張したりして随分盡力して下さつた。

潤澤小屋へ着いて見ると、潤澤小屋主人と奥原護、中尾の杉本の三人が今日白出瀧場の捜索を終つて引揚げて來たばかりとの事で、入念に瀧を調べたが遂に發見出來ずがっかりしてゐる所だとの事だつた。私共も遭難は白出の瀧場に相違ないと思つてゐたので、明日今一度私共と一しよに行つてくれないかと頼んで見たが、絶体に瀧には居ないと護は應じてはくれなかつた。そして、かくなつては白出下流の新道と左俣合流點上流の新林道の急斜面が問題だと言ふ。

翌二十三日念のために北穂高方面を調べて見たが何の効もなかつた。その前に營林署の一行や潤澤小屋主人が奥穂前穂方面を見てくれたとの事であつた。

二十四日白出谷を下る。瀧場をさけて右の尾根へ入つてゐる道が明瞭に上方から望まれるので、道を見落して眞直に瀧場へ下るやうな事は、特に一人旅ではあり得ないのではないかと思はれた。私共は時間もおそくなつた關係上瀧場には下らず道を行き、下の瀧壺を見たが異狀がなかつた。新道でも左俣合流點上流の急斜面でも異狀を認められなかつたが、とにかく主力をこの方面に注ぐ事として、

翌日又捜査し直す事とし、日暮れて槍見温泉に着く。田邊主計氏は其處から参加された。

二十五日は主として川筋を白出谷迄調べ、歸りには林道を注意した。何の手懸りもなかつたがどうもその附近が氣になるので又翌日見残した所を調べたが遂に何の効もなく、茨木氏は豫定の道筋では遭難してゐないといふ結論に達したやうな氣がして上高地に引上げた。其後で茨木氏とその夏行動を共にした伊藤、助川の二君が搜して下さつたが、同君達は濃霧のため道を誤り、知らず／＼白出瀧の頭に出たこと、その折川下の方から硫黄臭い臭ひがしたことで、醫學士である伊藤君は屍体は硫黄の臭ひのするものである事を語り俄然疑惑は再び白出瀧に戻つた。

二十年八月下旬に上賀村々長と書記の二人連は瀧下の雪溪下に眞二ツにさけたルツクを發見、中味は何もなかつたが、ポケットから日記、繪具、辨當箱等を發見、後で茨木氏のものと確定し、再び屍体捜索が行はれたが、遂に發見されなかつた。日記は十月二日迄記されてゐるが、判讀出來ない状態である。

斯くて氏の死亡は確認されたがせめてこの夏は骨を拾つて上げたと思ふ。各位の御支援をお願ひすると共に亡き茨木氏の御冥福を祈つて筆を擱く次第である。



## 會員通信

## 人と山と戦

望月 親

お葉書に依りますとやはり會の事務所も戦災の爲に失はれました由、何ともお慰め申し上げる言葉も御座りません。私もやはり戦局の急迫と共に良心的にも從來の營業を繼續して行くことに申譯ないやうな氣持になり、一昨年秋季に甲府の店を閉店して上京し、自由ヶ丘の鈴木忠治郎氏の許に在つて軍の或る醫務關係の仕事に努力して居りました。

戦争が罪惡であり、又戦が敗れ去つたにしても、やはり私共は民族の繁榮と人類の幸福な社會の實現することを祈つて居ることは變りはないやうに思はれます。

そして私達の人生に於て靜に冥想し、永遠の神の姿に接し得られるやうに考へられます。山や、山の生活や山の友人との交りなど心の中に喜の湧き出づる泉の源はやはり山を中心としたものにあつたやうな氣持が致します。

戦が深入りするに従つて岳友はあとから／＼と出征し、そしてその中の幾人かは悲しくも遂に戦の

野に倒れて逝つて終ひました。

こうした不幸が度重なるにつれて何時か知らず山を語り、山へ出かけて行くことがだん／＼遠慮騰ちになつて参りました。

それでも私にはやはり山への思慕は押へ切れず、上京後大森の洗足池の近く高豪の木立に圍れた叔父の家の二階から遠く丹澤や富士の峰を双眼鏡の中に間近に見ては一人靜に山の喜びに浸つて居りました。

そして山の油絵や寫眞や地圖に彩られて、羚羊（かもじか）の皮を敷布代りにして結んで居た山の夢も破れて、昨春五月二十五日夜その部屋もその住宅も空しく焼け失せて終ひました。

只残つた物は瓦やスレート、石壁やコンクリート、そして焼け枯れた樹の植込や山茶花の生垣、そこにはもう木犀の花も、サツキの花も沈丁花の花も咲く見込もなく残された者は唯茫然とした着のみの着のまゝの人達のみでした。

洗足池の近くから調布嶺町へ、私の生活は變つてゆきました。

七月六日夜陸軍と29の編隊が甲府を襲つて居る警報を聞いた時や、もすればもう戦争に對して癡痺し膠ちだつた私の心の中へ大きな石をほうり込まれたやうに感じられました。

悪い豫感に襲はれたら立ち立つ神經を押へてかけ付けた甲府の街は「損害極めて輕微なり」といふ軍の發表とは別に、私の目に映るものは燃え盛る炎、傷館とした罹災者の群、亡くなつた氣の毒な人達の姿……息詰る餘燼の中をあすこ此處と親戚や知人の宅を探し求めて見てもそれももう空しいことでした。

私を山本先生と呼んでいろ／＼の事を質問し乍ら従いて来る山梨工事の學徒、彼の意識はもう人間のものではありませんでした。これがない變りではた幾人かの親戚の人達の亡骸を前にして溢れ落ちる涙と慟哭とに、戦争の罪惡感と敗けつゝある悲しみと悔みとに身をふるはせて居りました。

『國敗れて山河在り』必勝の信念も、勝つてと言ふ自信も、勝ち度いさゝか希望すらも失つて力もなく舊店舗のあたりにもとの近所の人々を見舞つてお互にまああと慰め合ひ乍らふさふさとした煙の……夏雲の……あゝその中に動かざるもの『山』が在りました。煙と涙にはれたれた瞳の中になつたかしの南の連峰、駒、鳳凰、白根と探し求め乍らこんなにもひろびろと焼土の上と思ひ出の山々を望み得るやうさは知りませんでした。

北岳の頂で「君が代」を奉唱したあの日の感激に胸が迫つて、涙の溪間から希望の岩壁へと、よしとへ如何なる苦難はあらふさもやつと私の心に煙に新しい笑が浮んで参りました。何でも來い死ぬてやるんだ。

八月十五日思ひがけない終戦に依つて死を決定して持参した刀の必要も原子爆彈の脅威からも離れて、長兄の死去したことなども考慮して東京から甲府へさ當もない心も軽く身も軽い私の旅は始められました。

今萬屋の主（あるじ）として甲府の片田舎の茅屋に納つてひげも伸びる毛も生へるといふやうな生活を送り乍ら訪れて呉れる客や山友達と語り合ひ、春の芽生えを待つて居ります。

そして自らも自分の山林の見廻りに山深い村へ出かけて行つて里人の心のぬくもりとに接する時、秋の碧い空や清い溪の流れ、樹々の紅葉の美しさのやうに、山と人、自然と人情とがやけり別々のものではなく、同じものであつたやうに感じられます。

『山の頂には幸がある』ゲーテの言葉をそのまゝ求めて、麓から今出かけやうとする平和日本の建設さかへ静かな歩を踏み出さうと思つて居ります。

山の友情、清く、美しく、あたたかく、嵐が強ければ強い程、吹雪が猛れば猛る程固く結ばれるザイルのやうに、世が移り、人の心が變らうとも私達山仲間だけは何時迄もこうであり度いと祈ります

三月一日

坂井 喜造

拜啓 陳者去る二月十五日附章書拜受仕候條寒嚴折柄御障りもあらざれず益々御健祥に被爲港慶賀の到に奉存候次に御承知の通り當長崎市は廣島以上激烈なる原子爆彈にて市街の大半は破壊され候處私の家が幸ひ爆心より少々離れ候爲め無事なる事を得て生存仕居候間乍他事御放慮被成下度候御手紙に依れば虎ノ門、會の事務所も焼失せし由多年間に亘り御蒐集の藏書の如きも定めし烏有に歸したることと洵に遺憾に奉存候併し山岳會幹部皆様には何れ様にも御安泰の御事と拜察され若々會務復舊に御盡力被遊候事と力強く存候何分にも世の中が全く一變し敗戦國民の惨めささ唯、生さんが爲めに生活する有様なれば會の復活も容易ならざるべくと存候定めし幹部皆様の御心勞も嘸かじと存候へども一日も速く新日本建設とし

て再發足相成様祈願上候

本次庶々御親書を賜り厚く御禮申上候何卒此後宜敷御指導を矣々も御願申上候

拜具

二月二十二日

(編輯部註)

坂井氏はこの通信を執筆後間もなき三月八日急性肺炎のため長崎の自宅で逝去された。原子爆弾にも生き残られた喜びも僅かに半年で、本會復興への期待も空しく急逝された事は返すも残念である。我々はこゝにも無常迅速をしみ、感ぜずには居られない。謹んで氏の御冥福を祈るものである。

## 會務報告

### 役員總會

昭和二十一年四月三日午後二時於松方三郎氏邸開催

出席者

西堀、島山、冠、武田、松方、木村、中司、角田、田邊、織内垣内、塚本

本役員總會ハ三月廿四日招集シタルモノナルモ、檢閲ノタメ大部分ノ招集狀ハ延滞トナリシタメ流會シ再開催シタルモノ

三月廿四日出席者

島山、松方、大島、塚本

議題 (議長西堀副會長)

一、任期满了セル役員改選ニ關スル件

改選ヲ行フ事トス

該當者如左

理事

横、西堀、島山、冠、中原、今西

幹事

塚本、交野、松井、金山、山口、栗飯原、富田、織内、兼松、田邊、小野、杉本

評議員

中村、田部、榎谷、松方、角田、藤島、沼井、三木、別宮、額田、加藤、中司、津田、吉澤

監事

木村

右ニ對シ新役員候補者ヲ推薦ノ上次回役員總會ニ持参又ハ送附セラレタシ、尙現役員ノ重任ヲ妨ゲズ新人モ亦歡迎スルトコロナルモ参考ノタメ京濱、京阪附近在住ノ元役員ヲ記セバ大体左ノ如シ(略)

一、會費値上ニ關スル件

經濟不安定ノタメ本年ハ値上ヲ行ハズ、山岳發行ノ場合ハ會員ヨリ費用徴集ノコト

一、會員總會ハ六月一日(土)午後二時於藏前工業會館開催ノコト

## 會員消息

扇山豪夫氏 復員

佐藤文章氏 復員、醫院開業

加藤誠平氏 夫人を亡はる

山田 力氏 復員

中村 謙氏 興亞商業兼日本橋女子商業學校長を退職

田邊多聞氏 京都市電氣局長に就任

今村信吉氏 沖繩に令息を亡はる

中村 一氏 復員

友田彦士氏 同

錦織保清氏 宮城縣刈田郡福岡村役場に勤務中

仲西政一郎氏 復員

福田 碧氏 廣島にて戰災負傷せられたるも全快

大坪 藤麿氏 復員

中田伸直氏 同

兼松 學氏 (運輸省企畫局第二課長兼港外室長) 企畫局廢止のため港外室長專任となる

今村 昌耕氏 軍艦上にて負傷せるも全快復員

三浦 登氏 復員

萩原時夫氏 同

浦松佐美太郎氏 文藝春秋三月號に「日本的といふこと」執筆

桑原武夫氏 人間二月號に「日本現代小説の欠點」執筆

藤島 玄氏 旅行の途次上京連絡所に立寄らる

三浦 登氏 復員

村尾金二氏 シンカポールより歸還、石油販賣統制會社へ復歸

小野寺道敏氏 四月中に赤石岳に登山の豫定

小野寺道敏氏 四月中に赤石岳に登山の豫定

小野寺道敏氏 四月中に赤石岳に登山の豫定

小野寺道敏氏 四月中に赤石岳に登山の豫定

小野寺道敏氏 四月中に赤石岳に登山の豫定

小野寺道敏氏 四月中に赤石岳に登山の豫定

小野寺道敏氏 四月中に赤石岳に登山の豫定

小野寺道敏氏 四月中に赤石岳に登山の豫定

小野寺道敏氏 四月中に赤石岳に登山の豫定

小野寺道敏氏 四月中に赤石岳に登山の豫定

小野寺道敏氏 四月中に赤石岳に登山の豫定

小野寺道敏氏 四月中に赤石岳に登山の豫定

小野寺道敏氏 四月中に赤石岳に登山の豫定

小野寺道敏氏 四月中に赤石岳に登山の豫定

## 受 贈

拾圓也 鈴木清三郎氏

通信費として寄贈

參拾貳圓五拾錢 喜賣局風光會

圖書室復興基金として寄贈

五百圓也 藤島敏男氏

亡き令夫人追善のため圖書室

復興基金として寄贈

## 會費お願い

先號にも申し上げましたが、本年度會費十圓を至急御送附の程重れてお願い致します。

昨年度は戦災や印刷不能で全く事業が出来ませんでしたので、會費の請求は致さないことになりましたが、爲に會の財政は極度に困難な状態であります。併し會報も毎月發行し「山岳」も是非復刊したいと努力中でありますので、御賢察の上御送金の程特にお願ひ申し上げます。

前號に挿入致しました振替貯金用紙は只今は容易に入手出来ないものでありますので是非御利用下さい。振替貯金はまだ大變な目數がかゝりますが、安全確實といふ點から御利用下さる事をおすすめ致します。

## 編輯後記

印刷關係、寄稿關係等が軌道に乗る迄私が編輯にあたります。本號の内容は前號復刊第一號よりいづらか整つて来たと思つてゐますが如何でせうか。

松方さんが多忙な中に執筆下さつた事を嬉しく思つて居ります。減多に執筆されない前さんが前號に美しい隨筆をお書き下さつた事と合せて厚く御禮申上げたい存じます。

土田氏の紀行は冬の樺太中央山脈を單獨横斷された驚異に値する記録で、裝備や食糧等についても

つと詳しい記録を「山岳」にのせて下さる事をお願いしたいと存じます。白山の「カンコ跡」も亦得難い研究として本誌を飾るものでありませう。茨木さんの追憶記を書いて下さつた望月達夫氏（元本

誌編輯者）は遠く北千鳥ボロムシロ島の戦線にあつて物されたものであつて全く感謝の言葉もありません。その望月氏が昨夏以來全然消息を絶つてしまひました。或ひはシベリヤ邊りへ連れて行かれたのではないかと噂してゐるのであります。同氏のことだから不幸の中に幸福を見いだしてシベリヤの風物に親しみたり、ロシア語の勉強したりして元氣にやつて居られるものと想像されるのであります。が、何れにしても一日も早く歸國される事を留守の方々と共に御待ちするものであります。其他御多忙の中無理に筆をお取り下さつた各位に厚く御禮申し上げます。

本會の會員中全國各都市での被災者は七百名以上にのぼつてゐるのではないかと思はれます。まだ連絡のとれてゐない會員が多數ありますので、お知合ひの方の轉居先をお知らせ下されば早く連絡がつくと思はれます。無駄な事と思はさうぞお知らせ下さい。

罹災の有無について問合せて居りますうちに、戦死なさつた方、戦災の犠牲となられた方、色々々々難儀をなさつた消息が知れて参りました。感無量であります。それ等の事なるべく詳しくお知らせしたいのですが、誌面がせまく載



せられず困つて居るので、次號邊りから誌面を四ページ程増せるかどうか目下検討中であります。

復刊第三號も引續きお目にかけたいと努力中であります。

本號も亦新潟市在住の會員藤島玄氏に一方ならぬ御面倒をおかけしました。氏は自ら印刷所に行つて校正の活字を動かして下さつてゐる状態で、其他印刷の促進に本會との連絡に、紙屋との交渉や發送等々並々ならぬ援助を受けて居ります。氏の援助なくしては本誌の復刊は決してさう順調に進まなかつた筈であります。各位に報告して改めて氏に謝意を表する次第であります。

(塚本繁松)

× × ×

昭和二十一年五月二十日發行

頒賃金一圓・送料十錢

東京都目黒區駒場

編輯兼 塚本繁松  
發行者 塚本繁松

藤澤市鵜沼六三四〇

發行所 法人日本山岳會  
會員番號三二四二六號

新潟市西堀通三番町

印刷人 本田芳平

新潟市西堀通三番町

印刷所 昭和時報社  
電話七二四番

東京都神田區淡路町二ノ九

配給元 日本出版配給株式會社

## キスリング型(E式)

### ルックザツク

私儀東京の店舗を閉し左記に疎開中ですが従前通り布地をお持ちの方にルックの仕立を致して居ります。直接御來店をお願い出來ず御面倒ではございませうが左の方法により御注文を承りますから何卒御用命の程お願い申し上げます。

御仕立は誠實入念に致します。

- 一、先づ御所持の布地見本を御送り下さい。
- 一、その際布地の寸法とルックの大きさを御指示下さい
- 一、それ等を拜見の上御注文を承ります。
- 一、御仕立賃はその折申上げます。

長野縣下伊那郡喬木村阿島上町一ノ六三八

### 片桐盛之助

## 通常總會開催御通知

日時 六月一日(土)午後二時  
場所 藏前工業會館(新橋驛前)

### 議案

- 一、收支決算報告及豫算附議ノ件
- 一、任期満了ノ理事、幹事、監事選任ノ件
- 一、其 他

昭和二十一年四月

社団法人日本山岳會

追而右ニ關シ當日御欠席ノ向ニテ御意見有之候ハバ前日迄ニ御申出相成度、御意見無ク欠席ノ向ハ午勝手委任御出席トシテ御取扱申上候間御諒承被下度願上候

東京都京橋銀座  
八丁目出雲ビル

山と溪谷社

振替東京  
六〇二四九番

## 戦後岳界の出版を一手に擔當!

|             |         |       |                       |         |         |    |           |         |        |         |            |        |       |       |         |       |          |                              |
|-------------|---------|-------|-----------------------|---------|---------|----|-----------|---------|--------|---------|------------|--------|-------|-------|---------|-------|----------|------------------------------|
| ★山と溪谷       | ★冬の志賀高原 | ★上越國境 | ★アルペンダイ               | ★奥多摩の山旅 | ★日本の山々Ⅱ | ★溪 | ★山岳寫真作品集Ⅰ | ★かひ・しなの | ★山岳版畫集 | ★山の温泉科學 | ★北米氷河山岳跋涉記 | ★紀行と隨想 | ★山岳歌集 | ★片雲抄  | ★氷雪圈の記錄 | ★鳥と山旅 | ★近代登山黎明史 | ★山岳版畫小品集                     |
| 一部三六圓(送二〇〇) | 塚本      | 塚本    | 一九四六―七年度<br>十二圓(送三〇〇) | 眞鍋健一著   | 塚本      | 冠松 | 河塚        | 畦地海太郎著  | 伊東祐一著  | 東良三著    | 三田尾松太郎著    | 川崎隆章著  | 冠松次郎著 | 加納一朗著 | 中西悟堂著   | 志村未定著 | 藤本未定     | その他「登山地圖帳」「五萬分登山圖」等五十餘點續々刊行! |